

I S sword of wing

星光の破壊者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏は女性しか扱えないIS（インフェニット・ストラトス）を扱える男性として世界を騒がせた。しかし、彼よりも前にISを動かした男性がいる。そいつは世界最強とよばれた織斑千冬が認めるほどの力を持ち。当時のIS学園では『剣帝』とも『最強の上を行く最強』とも呼ばれるほどだった。そんな彼がIS学園の教師として母校に帰ってくる。

目次

第十二話	52
第十一話	47
第十話	42
第九話	38
第八話	31
第七話	26
第六話	23
第五話	19
第四話	12
第三話	9
第二話	5
第一話	1

第十三話	55
第十四話	61
第十五話	64
第十六話	72
第十七話	81
第十八話	86

第一話

P i P i P i P i ……

ん??誰だこんな時間に

「もしもし」

『剣斗か??わたしだ』

「千冬か?どうした?こんな時間に」

『なに言ってる。もう朝の7時だぞ』

「こっちは深夜の2時だ」

『それは……すまない』

電話の向こうで困った顔の千冬が目に見え浮かぶ。それは、それで新鮮なのだか

『剣斗。今、変な想像していただろう』

「ああ。千冬の困った顔を想像していた」

『// // // な、なにを……想像しているのだ!?! バカモノ// // // 』

顔が紅くなる千冬もたまに良いよな。しかし、これ以上からかかったら後が怖いから

ん()までだな。

「それで、こんな夜遅くに電話してきたにはそれなりの理由があるんだな」

『あ…………ああ…………』

俺の声を聞いて千冬は歯切れが悪くなる。当たり前だ。人が寝てる、まして深夜2時に電話で起こされたら誰だって怒るだろう。

『実はお前にI S学園の実戦教師になってもらいたい』

「それは、I S学園の元生徒だから呼ぶのか？それとも姉として弟がI S学園に行くから面倒見て欲しいのか？どっちだ。言っておくが後者ならお断りだ。俺はそういう事は知らんし知る必要もない」

『…………』

「黙りは後者と言うことだな。千冬、確かにそいつはお前の唯一の肉親かもしれないが、いい加減甘やかすのは止めろ!!俺はそんなお前に惚れた訳じゃない。ましてや、そんなお前の顔など見たくない。話は以上だ。もう切るから一度頭を冷やし来い!!」

言い終わると同時に俺は電話を切った。俺が千冬を惚れた理由…………それは、アイツは俺を特別扱いしなかったからだ。

千冬の親友篠ノ乃東が開発したI Sによって今までの男女の関係が逆転しそして俺は世界で一人目の男でI Sを動かせる男になった。

強制的にI S学園に入れられ嫌気を差していた俺に気軽に声をかけてくれたのが千

冬ともう一人の女の子であり今の俺がいるのも千冬達のおかげだからだ。

そんな千冬が今も昔と変わらず弟を気にしすぎているから俺は怒っているのか？よく考えてみたら俺はアイツの弟に嫉妬しているだけじゃないか？

取りあえず今はアイツに連絡でも取ってみるか。その前に番号改善と逆探知出来ないようにしてとetc

P

『ハロハロ。けんくんの妻の篠ノ乃束だよ〜』

よし。まずは電話を

『ちよつとちよつと!!切らないでけんくん』

「束。次は無いぞ」

『は〜〜〜い。それで、けんくんから電話なんてどうゆう風の吹き回しかな?』

「ちよつとな。けど、いいや。本人に直接確かめたほうがよさそうだ」

『ちーちゃんのこと?』

「そうだ。取りあえず学園にでもいるから何かあっても連絡して来るなよ」

『そこは』してこいよ』だよ〜。しかし大丈夫。天才束ちゃんにかかればけんくんの番号などい』s』

さして寝るか。

とある秘密アジト

『プープープー』

ふふふ。けんくんいい度胸だね。この束ちゃんも勝負しようとは。とりあえずリダイアルつと

『おかけになった番号は現在使われておりません。もう一度番号をお確かめになって再度おかけください』

「ふにやあああああああ!!」

ならばはさつききの電話から逆探知……ロンドン?パリ?フランクフルト?ニューヨーク?北京?どうゆうこと!!ならe t c ……すべて敗北。うう……

第二話

どもども、黒羽剣斗（くろはけんと）です。

俺は今母校IS学園の門の前にはいます。卒業した日より綺麗になった母校を後ろに千冬に電話電話と。

「……もしもし、千冬。今学園の門の前にいるから五分以内に迎えに来てね。拒否は認めないから。それじゃ」

『さて、けん』

これでよし。残り時間四分四十二秒と

『プープープー』

「……………」

「織斑先生。どうかしましたか??」

「い、いや。山田君、私は少し出掛けてくる。SHRを頼んだ」

「えっ!!ちよつと!!織斑先生!!」

なぜ来たんだ。私はまだお前に答えを出していないぞ、剣斗。それに五分つて……
まずい。あいつは時間に五月蠅かった。もし遅れたら……考えたくも無い。

……5……4……3……2……1……チーーン。千冬OUT。

さてと、このメイド千冬写真を誰に送ろうか??ここは無難に束かな??それだと『もつと頂戴!!』とか言いそうだな。

それに送ったら逆探知されそう。……ここは千冬に選んでもらおう。

「け、剣斗」

「お!!来たね。千冬、TとIとNどれがいい??」

「テ、テイデオネガイシマス」

「了解。……送信と」

お!!紅いね。恥ずかしそうな顔の千冬も可愛いね。これはISの画像登録に入れて後でPCと携帯行きだね。これで、また弄れる材料が手にはった。

「き、聞いてもいいか?」

「送信先は束で、画像は昔の千冬のメイド服姿だよ」

「き、貴様ああああ!!」

千冬がIS用ブレイドで切りかかってくる。そんなに恥ずかしいかな??可愛いのに。

P i P i P i P i …

おっと。電話だ。

「もしm『けんくん!!けんくん!!この画像他には無いかな??あるなら束ちゃんに頂
d』」

切る。ああ〜この携帯もう使えないよう。どうしよう??

「誰からだ」

「束。『もつと頂戴』だつて。どうする??あげるか??」

「頼むから止めてくれ」

「仕方が無い。今回は二秒だからこれで許してやろう。学園長室まで案内してくれる
かな?」

「あ、ああ。こつちだ」

千冬の案内で学園長室に向かうと昔と変わらず俺の知っている学園長だった。卒業
から十年立つても老けてない。むしろ美人になってるってどうゆう事ですか!?!女性の
神秘に触れた気がする。

「け、剣斗。どうして学園の実戦教師に。私はまだ答えを出してない・」

「ちよつとな。一応ナタルにも連絡したからあいつも来るんじゃないかな?」

「ナタルは今米軍専属のIS乗りだ。そうやすやすと来れまい」

「昨日電話したら『今度のISの試験運転終わったら来る』って言っていたぞ」
「・・・そうか」

「まあ、IS学園三帝が今年の夏に揃うってわけだ」

「その呼び名は・・・」

『『ブリュンヒルデ』の方がいいか??』

「そうは止めてくれ」

「それ〴〵なんだな」

「バ、バカモノ〳〳〳〳〳〳」

千冬の赤面顔ありがとうございます。

「さて、飯にしよう。俺腹減ったし」

「そ、そうか、もうそんな時間か」

「食堂のおばちゃん元気かな??」

「大村さんなら元気に此処で働いているぞ」

「マジ!!なら、早く行くぞ」

「お、おい!!」

俺は千冬の手を繋ぎ急ぎ食堂に向った。あの美味しい肉じやが食べられるぞ。

第三話

「おぼちゃん。久しぶり」

「おっ!! 黒羽君じゃないかい。なんだいあの頃よりいい男になって。みんな黒羽君が来たよ」

食堂のおぼちゃんは、中にいる他のおぼちゃん達を呼んでくる。それから他愛も無い話が続き気がついたら後ろには長だの列が出来ていたので、俺達は料理をもらってすぐさま俺の特等席に向った。

途中『あの人誰??』『私の千冬様となにしてるのよ』など聞こえたが、そこは無視無視。

「それで、クラス代表はもう決まったのか?」

「いや、まだだ。明日クラス代表を決めようと思つてな」

「一応候補はいるんだろうな? 代表候補生とか」

「イギリスの候補生がいるが、おそらく一夏を推薦する奴がほとんどだろう」

「昔の俺みたいにならなければいいが・・」

「無理だな」

「ですよねえ〜」

おそらく千冬の弟とそのイギリス代表候補生の対決で決まるだろう。

俺の時もそうだったな。三帝と呼ばれた三人が三年間同じクラスでクラス代表を決めるのはいつも一騎打ちだったし。おっと、噂をすれば

「千冬n「織斑先生だと何度も言わすな。バカ者」いっ!!」

織斑弟は出席簿で頭を叩かれた。千冬、その出席簿は何所から出したんだ?!

「はじめまして、織斑弟君」

「ええ〜と、あなたは誰d（パアン!!）いっ!!」

「世界初男でI Sを動かした男だ。それぐらい知っておけ。バカ者!!」

また出席簿で。束のアイアンクローの次は生徒出席簿アタックか、これは千冬を怒らせたら

「よつと。何をする??千冬」

「お前が何か変な事を考えていると感じてな」

「それだけで人を叩くのか、お前は」

「否定はしないのだな」

「事実だし。はじめまして、織斑弟君。俺は黒羽剣斗。千冬が説明したとおり世界初男でI Sを動かした男だよ」

「どうも。織斑一夏っています」

織斑弟が握手を求めてくるが俺はしない。興味ないからだ。そして、織斑弟の隣にいるのが

「篠ノ乃箒です」

「知ってる。君の姉、束には迷惑も掛けたし掛けられたから」

「……すみません」

「別に君が謝らなくていいよ。君は君で束は束だから」

「わかりました」

「それじゃ、俺は部屋に戻るよ。千冬、また明日」

「ああ。明日は送れずに来い」

「俺が時間に五月蠅いの知っているだろう」

「そうだったな」

俺は部屋に戻った。なぜか隣の部屋が千冬だった事は付いた時に驚いたけど明日からどうしようか……面倒だな。

第四話

「今日からISの実戦教官になった黒羽剣斗だ」

午後の授業の初めに俺は千冬のクラスに挨拶する。今日はたまたまIS関連の授業が午後からだったから今紹介と挨拶をしている。

「き……」

「……はあく……」。耳を塞いで

『キヤアアアアア!!』

やっぱり

「剣斗様よ!!本物の剣斗様だわ」

「IS学園黄金世代の三人のうち二人が揃うなんて。お母さん。この歳になるように生んでくれてありがとう」

「ワタシを食べてください!!」

「うるさいぞ。馬鹿共!!」

千冬の一括で一斉に静かになった。恐るべし女帝の力。そして、最後の言葉俺は聞か

なかつた事にするぞ。

「剣斗。挨拶ぐらいまともにできぬか」

「それはどうゆう意味だ。それと、この騒ぎはお前のクラスだけか？それとも全校こ
うなのか？もし全校なら問題ありだぞ」

「はあゝゝ。このクラスだけだ。毎年毎年私がつクラスはなぜこう馬鹿ばつかな
だ。不思議なぐらいにな」

「千冬様。鞭もいいけど偶には飴を下さい!!」

「わたしは剣斗様がいい」

「はあゝゝゝ」

俺と千冬は一緒に溜息を吐く。それを見ていた山田先生は何かを思い出したかのよ
うに生徒に話しかけた。

「ええゝゝと。今からクラス代表を決めたいと思います。志願者もしくは推薦者はい
ませんか?」

「はいはい。織斑君がいいとおもいまゝゝす」

「ちよつ!!」

「わたしもそれがいいでゝゝす」

「だから!!」

「なんだ織斑弟。お前は皆が推薦してくれているのにそれを断るのか?」

「うっ」

「他にいないか?いないn「お待ちください!!」誰?」

「わたくしの名はセシリア・オルコット。以後御見知りおきを」

「オルコットつと言う事はイギリスの代表候補生か。それで、なんだ。織斑弟が代表なのは反対か?」

「当然ですわ。クラス代表とはつまりクラス中のトップ。当然クラスの中で一番強い人がなるべきですわ」

「それで、その強いやつは誰だ」

「どうせ自分って言うんだろう。俺らの時は千冬、ナタル、俺の三人がなぜか同じクラスで一年づつ一回やったただだからな。」

「当然。イギリスの代表候補生であり専用機持ちであるこのわたくししかおりませんわ」

「それじゃ、代表は織斑弟で決定」

「ちよつと!!」

「なんだ??オルコット」

「どうしてわたくしの意見を聞いてもらえませんか??わたくしは入試の時唯一教官

を倒したエリート中のエリートなのですよ」

面倒だ。こつから先は千冬に任せてもいいかな?? いいよな。俺、新任の教師だし。

「俺も教官たおしたぞ」

さすが、千冬の弟。意地の張り合いか

「わ、わたくしだけと聞きましたわよ」

「女ではて、オチじゃないのか」

オチじゃないと思うぞ、織斑弟。

いくらなんでも I S 学園の教官が初めて I S に乗ったヤツに負ける w . . . あなたですか、山田先生。

俺が山田先生を見るとなぜか微妙に振れえていた。おそらく自滅したのであろう。じゃなければ負けるはずが無い。あれでも元日本代表候補生だったんだから。

「冗談ではありませんわ。こんな極東の島国まで来てその猿と比べられるなんて、この様な侮辱たえられませんか」

「イギリスだつて島国だろう。それにたいした自慢もないくせに、あるとしたら世界一不味い料理くらいだろう」

「あ、あああ貴方。わたくしの祖国を侮辱しましたわね!!」

「最初にして k 「黙れ」先生!! 先生は自分の祖国を侮辱されて「黙れって言うてるだ

ろう!!」

あくあ、他の生徒俺の声で泣き顔だよ。．．．なんで、山田先生はもう泣いているのですか??あなた一応元日本代表候補生でしょうが!!

「織斑弟。お前が祖国どうこう言えたもんじやないぞ。お前もオルコットの祖国を侮辱したのだからな」

「しかしそれは!!」

「イギリスは世界初の産業革命国であり。伝説の騎士王アーサー王の生まれた所だ。それ以外にもイギリスには良いところはある。それなのにお前は食べたことのない料理を不味いと言って地図やテレビでしか見た事の無い国を批判するのか??」

「しません」

「なら、俺の言いたいことは分かるな」

「はい」

織斑弟撃墜と。あとは

「それとオルコット」

「は、はい」

「ISを生んだのはその極東の島国の一人の女性だ。そのおかげで女が男より偉くなってるのだぞ。その辺を弁えろ」

「はい……」

「それじゃ、二人には来週の月曜の放課後クラス代表権を賭けた決闘をしてもらおう。勝った方に誰を代表をするか権限を与えるから精々ががんばれよ」

「そう言い終わると俺は教卓から降り千冬と交代した。すると山田先生が俺に近づいてくる。さっきの会話に何か問題でもあつただろうか??」

「さすがですね、黒羽先生」

「なにがです。俺はただ、授業を遅らせないように最善の解決策を言ったまでですよ」

「そこがです。私なんて何も出来ないまま織斑先生に頼っていたと思いますから」

「人のは出来不出来がある。山田先生には出来て千冬には出来ない事はきつとあるはずだ。人は万人ではないからな」

「そ、そうですか!!」

「あああ」

「そうですよね。なら、私も私の出来る範囲でがんばります!!」

「その意気ですよ。山田先生」

その後、織斑弟がオルコットにハンデがいるかないかでもめ千冬必殺出席簿落し
(命名俺) 炸裂。

『今まで以上に強烈だ』と織斑弟が頭を大きく抱えながら呟いていた事を報告してお

こう。多分それは俺のせいだから。

第五話

P……カチ

「はあ~~~~」

現在時間午前5時。

ジャージ姿に着替えた俺は日課の鍛錬のために寮から出て寮の周りを10周する。朝はこのランニングと基礎筋力、腕立て、腹筋、背筋等を鍛え夜は剣術の鍛錬。学園に来てからはプラス学園業務となかなか良い日々を送っているな。

今日は織斑弟とオルコットの代表決定戦だ。

発案者である俺が試合の審判をしないといけないみたいだが、その辺は管制官の子にでも頼むとするか。

鍛錬が終わりシャワーを浴びてスーツに着替えると時計は7時を指していたのでそのまま食堂に向かった。

S I D E : 織斑一夏

今日はとうとうオルコットとの対戦の日だ。けど、俺は全然集中ができていない。なぜなら昨日の夜千冬姉が部屋に来てこんなことを言ってきたからだ。

『一夏。お前は昔誰かを守りたいと言っていたな。それは今も変わりないか?』

『あたりまえだよ、千冬姉。どうしたんだ。いきなりそんなこと聞いてきて?』

『……なら、剣斗を見続けろ』

『え?!』

どうして、そこで黒羽さんの名前が?!

『いいか一夏。あいつは……剣斗はお前と同じで誰かを守るために心を剣に変えた。そうして誰かを守ろうと正義の味方になろうとした。お前に人を傷つけても守るその覚悟があるか?』

『そ、それは……』

『別に今決めろとは言わん。だが、いつかは決める時があるかもしれない。そうなればお前はどうかするか、今からでも考えて損はないはずだぞ。それと、今後あるかどうかわからないがもし剣斗がISに乗れば何でもいいから何かを学べ。いいな』

その時の俺はただ頷くだけしかできなかった。

そして気がついたら放課後になっていた。

「なあ箒」

「……………」

「俺 I S について教えてくれって言ったよな」

「…………… (プイ)」

あつ!!目をそらすな!!

「し、仕方がないだろう。お前の I S はまだ届いていないのだから」

「だったら。乗り方のコツを教えてくれるなり色々あっただろうが」

「う、うるさい!!」

どうすんだ俺。負ける気なんてさらさら無いけどこのままじゃ……

「仲が良いな。お二人さん」

「!?!」

「く、く黒羽さん (スパーン!!) いっ!!」

「黒羽先生だ」

「だって千冬さん (スパーン!!)」

「織斑先生だ。馬鹿者」

千冬姉に同じ所を二回殴られて俺の頭はタンコブができてないか心配だな。

「お、織斑君」

「なんですか? 山田先生」

「やっと来ました。織斑君のIS」

「お、俺だけのIS」

「そうです。織斑君だけのIS《白式》です」

「俺だけの………IS」

俺はゆっくり白式に手を当ててみると。感じる。馴染む。此奴とならいいける!!

「織斑弟。そろそろ時間だからさっさと乗ってくれないか??それと初期設定等は戦いながらやれ」

「え??ちよっ!!」

「背中に預けるように。あとはシステムが最適化してくれるはず??」

「どうしてそこで??がでるのですか!？」

「それじゃ、カタパルトに足を乗つけて」

「無視ですか!!」

「でわ。負けてらっしゃい」

「え、えええええええ!!」

第六話

黒羽剣斗だ。

織斑弟とセシリアの代表決定戦の結果は織斑弟の負けで終わった。なに??

戦闘場面がないだって。それはあれだ、説明不要なくらい不様な戦いだったってことだよ。

それでも必要なら簡単に言うとな織斑弟は最初は初期設定だけで戦っていて途中ファーストシフトになり雪片を出しワンオフ・アビリティ『零落白夜』を発動。ワンオフの能力を知らず使い続けシールドエネルギーが0となり試合終了。

ワンオフの能力もわからず使うとは馬鹿丸出しだな。千冬も呆れてなにも言えずにいる。

「まあ、織斑弟が馬鹿だとわかって良かったな」

「.....」

反応がないまるで屍のようだ。

「私はまだ生きてるぞ。勝手に殺すな!!」

「心読まれた!!とうとう俺と千冬は以心伝心まで出来るようになったのか!」

「どうでもいい。それで、お前から見てあいつはどうだ??」

「馬鹿。それだけだ。それ以上でも以下でもない」

「・・・そうか」

俺の答えを聞いて千冬はまた黙りだした。良い答えを期待していたのだろうが俺はあいつには興味が無い。だから今の戦いを見て正直な答えを言ったまです。

「山田先生。俺はオルコットの方へ行くので後は頼みますよ」

「あ、はい。わかりました」

空気となりかけていた山田先生にあとを任せてオルコットの方に向かった。最後に山田先生が「ひどい」と言っていた気がするが無視無視。

S I D E : セシリア・オルコット

試合が終わりわたくしはピットに戻り置いてあった椅子に座りました。

なぜ座ったかというと、さっきの試合勝ったのはわたくしでしたけど勝った気がしませんでしたから。あの試合最後はどう見てもわたくしの負けが確定してましたから。

その事を考えていると黒羽先生が入って来ました。

「勝った気がしてないようだな」

「はい。あの試合はどう見てもわたくしの負けでした」

「そうだな。だが、お前が勝った。それは紛れもない真実だ」

「しかしあれは」

「甘ったれるなよ小娘!?!」

黒羽先生の怒りの声が響きわたる。

「他かが十五年生きてただけでいっちょよまえの事を言うな。偶然でも勝てたのだから喜べる時に喜んでけ。勝ち負けの良し悪しなんてまだ考えるな。いいな」

「は、はい!!」

その後黒羽先生は部屋から出ていき。出ていく間に代表の件は明日聞く言い残し出ていきました。

「喜べる時に喜んでけですか・・・」

黒羽先生が言っていた事を考えますと、あの時の織斑一夏の顔を思い出してしまふ。もしあの試合が彼の勝ちなら彼はどう喜んだのだろう。負けてしまった今どんな顔をしているのだろう。彼の事をもっと知りたい。彼のそばにいたい。

これが今のわたくしの気持ち。

第七話

「では、一組の代表は織斑一夏君に決定です。あ!!一繋がりでもいいですね」

山田先生がクラス代表の名前を発表する。

今朝オルコットが職員室に来て俺に言つて来たからそのまんま山田先生に発表させた。それを聞いて織斑弟が手を上げて発言権を手に入れた。

「俺は昨日の試合負けたのですが、どうして代表になつていのでしょうか?」

「それは・・・」

「それは、わたくしが推薦しましたからですわ」

山田先生が言う前にオルコットが言い張った。

山田先生が「わたしの出番が・・・」と訳わからん事を言っているが無視無視。それを聞いた織斑弟はなぜ?とした顔をしているから俺がここで横槍を入れてやろう。

「織斑弟。俺は言ったよな代表権を賭けて決闘をするつて」

「へ??」

おっと。ここまで聞いてまだわからないのか。これはもうどうしようが無いな。

「つまり昨日の勝者はその権利を使って誰かを代表にする権利を与えられたのだ。それで、オルコットは勝った。そしてその権利を使って織斑弟を代表にしたのだ」

これでわからなかったら・・・よそう。考えるだけ無駄なきがする。

「まあ、わたくしもあの時は少々頭に血が上りすぎていましたわ。反省します。それで、一夏さんに代表になって頂くこうと思いましたが」

「さすがセシリア。わかっているねえ〜」

「折角 I S を操縦できる男子がいるのだから持ち上げないとねえ〜」
売る気満々だな。

俺の時もそうなりかけたけど。・・・あ!!ちなみにその時止めてくれたのは千冬だ。その後なぜか千冬と模擬戦がおまけで付いてきたな。

もちろん勝ったけど。

「それで一夏さん。もし宜しければわたくしが I S の操作等の御教授をしてあげましても——」

「あいにくだが一夏の教官は足りている。お引取り願おう」

オルコットと篠ノ乃が言い争っている。修羅場だね。いや、若いっていいもんだな。おっとそろそろ千冬の出席簿アタックが

ゴッソ!!

落ちた。

「!?!」

「五月蠅いぞ、バカ共!! お前達はまだまだひよつこだ。誰が教えるかなんかで揉めるな」

「はい」

二人とも戦意喪失と。恐ろしいな出席簿アツタク。

「黒羽。いい加減いらんことを考えていると黒羽にもするぞ」

「当てれるならどうぞ」

ブン!!

ヒョイ

「ちっ!!」

「それじゃ俺は先に職員室に戻っているから」

「ああ」

「コーヒー入れて待ってるぞ」

／／／／／

S I D E : 織斑千冬

「コーヒー入れて待ってるぞ」

「／／／／／」

あの顔。時たま見せるあいつのあの顔に私はなんど心を奪われた事か。

そしてその顔が見たくてどうしようがない私はやはり剣斗の事が好きなのだ。この顔を見ると再度確認してします。ほんとうに憎たらしい顔だ。

そうと決まればさつさとHRを終わらせて剣斗の入れたコーヒーを二人で堪能する
 としようか。

「朝の報告以上だ。なにか質問はあるか」

「あれば叩く!!」

「・・・ないようだな。なら授業の準備をしておくように」

そして私は上機嫌で職員室へ向った。

おまけ

「朝の報告は以上だ。なにか質問はあるか」

「(い、言えない。織斑君代表就任パーティーしようなんて)」

「(今なにか言うかと絶対に)」

「(叩かれる!!)」

その時の千冬の殺気は弟の一夏も初めて感じるほどの凄まじい殺気だったそうだ。

第八話

四月の下旬。ようやく基礎知識を身につけた一年生は、本格的にISを使つての実技指導が入るわけだが。

四月の下旬だと暖かくて眠気が出るんだよね。本当日本の四季はいいもんだ。

「今日からISの実施訓練を始める。とりあえずオルコット、織斑弟。展開して飛んでみる」

「はこ」

「・・・はこ」

オルコットは言い返事だが織斑弟はすこし不満そうだな。

「黒羽先生は乗らないのですか??そのラファールに」

「乗るには乗るが、折角専用機持ちがいるんだそいつ等もやらせたほうがお前等もいい刺激になるだろう」

「そっかあ〜」

「そうゆうことだ。オルコット、織斑弟展開しろ」

そう言いつつ俺の後ろにはラファールを用意してるけど。なぜか千冬が持て来て。

「遅い!! 熟練した操縦者なら展開までに一秒も掛からんぞ」

相変わらず敵しいな千冬は。一年生に一秒で展開させr・・・弟だからか?? 轟
貞だな。

「集中しろ」

ああ。女子の目の色が百合色に輝いて「何時か私も」と言ってるよ。本当に大丈夫かこのクラス。おっと俺もその間にラファールに乗るとするか。

「展開が出来たみたいだな。そこから急上昇だ。飛べ!!」

俺の指示に従い二人とも大空へと飛び立った。しかし白式の方が出力上じゃなかったか。まあ使い手が悪いだけか。

「遅い。スペック上の出力なら白式の方が上だぞ」

千冬が怒ってる。たしかにあんなにノロノロ飛ばれたら怒りもしますか。

「わかっていてと思うが、飛行に一番大事なのはイメージだ。自分にあつたイメージを探し出すように」

『は~~~~い』

「ちなみに黒羽先生はなにですか??」

「俺か。俺は戦闘機とか鳥とか空を飛んでいるモノをイメージしてるな。実際にそう

いうのをイメージすると以外とスピードが出たりするからな」

「ふおへえ〜〜」

「それじゃ、俺も飛びますか」

膝を少し曲げ助走をつけて一気に織斑弟のいる所まで上昇する。それを見ていた千冬が下の生徒に説明をしていた。

「今のが世界トップレベルの技だ。アレをしろとは言わんが出来るだけ早く上がるよ
う心がけろ」

『はい』

「は〜〜い。織斑先生も出来ますか?」

「私も黒羽みたいにスムーズに出来んが、一応出来るぞ」

「ほお〜〜」

さてさて、どうやらオルコットと織斑弟はなかなか良い雰囲気を出しているがコレを
見ていると

《一夏!!いつまでそんな所にいる!早く降りて来い!!》

ほれ、篠ノ乃が怒ってるぞ。しかも山田先生のインカメ奪い取って

「それじゃ、急降下から完全停止でもやろうか。目標は10cmでいいだろう」

「なに、そのいい加減さ」

無視無視。

「千冬。今から急降下からの完全停止やらすか」

《わかった。目標は何cmだ?》

「一応10cmを言っている」

《了解した》

「それじゃ、誰から行く?」

「わたくしから行きますわ。一夏さん見ていてくださいね」

一夏にウインクしてオルコットが急降下し地面から10cmのところまで完全に停止した。当然の結果だな。

「ほれ、次はお前だぞ」

「は、はい」

織斑弟が急降下して行ったそして

キュウウウウー……ズドオオオオン!!

地面に激突し大きな穴を開けた。

《バカモノ!!誰が地面に衝突しろと言った。グラウンドに穴を開けよって》

千冬がお怒りになり織斑弟はシユンと小さくなっている。これ、まじで笑える。

「くくく……」

《黒羽。お前を何時までそこにいるつもりだ。早く降りて来い》

「はいはい」

完全停止・・・1cm位でいいかな。あまりにすぎても勉強にならないし。

俺は急降下し地面から1cmの所で完全停止した。

『おおおお』

「全員の目標は10cmな。専用機持ちは5cmだ。いいな」

『はい』

「あと、織斑弟はこの穴を授業終了と同時に埋める事。もちろん一人で」

「わ、わかりました」

まあ、IS使えばすぐに終わるだろうから次の授業には間に合うだろう。

「織斑、武装を展開しろ。それくらい自在にできるだろう」

「はい」

千冬。俺の仕事取らないですよ。俺いる意味無いじゃないか。

織斑弟はイメージシ雪片式型を展開するのだけどやはり遅いな。これじゃ、敵のいい

的だ。

「遅い!!0.5秒で出来るようになれ」

弟には厳しいですね。千冬。

「セシリア、武装展開してみろ」

「はい」

オルコットはさすが代表候補の事あってなかなかのスピードだ。だが、誰を撃つきなのかね。

「流石は代表候補生といったところか」

「ありがと「ただし」・・・」

「そのポーズはやめろ。銃身を真横に向けて一体誰を討つ気だ」

「で・・・ですが、これはわたくしのイメージを纏めるに必要な・・・」

「直せ。いいな」

「は・・・はい」

鬼の睨みまさにこれだな。おそろしい。くわばらくわばら。

「黒羽。何へんな事を考えてるんだ。さっさとお前も展開して見せろ」

「はいはい」

返事と終わりに俺の両手には二丁の銃が織斑弟とオルコットに向けている状態にした。

『おおおお』

「いいか。黒羽はこれでも手を抜いてやっているんだ。お前達もコレくらいになれる

ように昇進しろ」

「あ、あの速さで手抜きって」

「さすが剣帝と呼ばれた御方。すてきです」

「あの〜。武装展開のコツはなんですか?」

「一番いいのは武器そのものをイメージする事だが、無理な場合はそれに近いものをイメージする事だな。例えば剣類なら俺や千冬をイメージすると出やすいんじゃないか」

「なるほどお〜。ならわたしは千冬様をイメージする!!」

「あ!!ずるい。ならわたしは剣斗様を想像するは!!」

女子から薔薇色の声が出始め山田先生はおどおどしながらも鎮めさせようとしているがここは鬼の一言で黙るだろう。

「静かにしろ!!」

『.....』

ほら、千冬の一言で止んだ。

「ふう。時間も丁度いいし今日は此処まで。全員次の授業に遅れないように着替えてくる事。織斑弟は言ったとおり穴を埋めてから来るように。以上解散」

第九話

黒羽剣斗だ。

今日は中国から転校生が来るらしい。

この時期にこの I S 学園に来るとはどんな我儘娘だか。ついでに言うとな俺はその我儘娘とは会っていない。俺が用事で職員室にいない時に来て 2 組の担任が教室まで連れて行ったからだ。

「そういえば、千冬は転校生の事知ってるんだったよな??」

「なんだ?? 気になるのか??」

「いや。ただ一年前に中国にいた時が在って、その時教えた子がいたからもしかしてその子かな??」って思っただけだ」

「ほう。剣斗が人に I S を教えるとは」

「その子のお母さんに御飯御馳走になったからそのお返しにな」

ちなみに、千冬は俺と二人っきりの時か休憩休暇の時のみ俺の事を『剣斗』と呼ぶ。高校時代のときは普通に剣斗だったのに残念だ。

「ん??どうしたんだ」

「いや。やつぱその呼び方統一したほうが言いなあつと思っただけだ」

「仕方ないだろう。ここではお前を私も教師なのだから。公私混合する訳にわいかないのだ」

「御尤もだ。つと、千冬あいつか2組の転校生は?」

俺が指差す女子を見て千冬は『ああ』軽く頷いてそいつに近づいて行つた。もう予鈴は鳴っているからおそらく

バシン!!

千冬の出席簿落しが綺麗に入った。今回は平面と優しいほうだったと足しておこう。

「もう、SHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

「織斑先生と呼べ。さっさと教室に戻れ。それと入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「は、はい!!」

女子は急いで2組の方へ走ってきた。そうすると必然的に俺の顔を見る事になって俺も少女の顔を見てみると

「「あつ」

見事にハモツタ。そして

「先生!!お久しぶりです」

「久しぶりだな、鈴。色々話したいと思うが取りあえず教室に行け。話しは昼休みに食堂でいいだろう」

「はい!!」

まさかの転校生鈴と別れた俺はそのまま1組の教室に入って行っただけどころには鬼と化した千冬さんがいらっしやいました。

「遅かったな剣斗」

「千冬さん。名前で呼んでますよ。公私混合しないってさっき言ったばかりでは」

「そんなのはどうでもいい。山田君。SHRのほう頼む」

「は、はいいい」

山田先生は泣きながらも頷いてSHRを始める。つておい!!俺を見捨てるな!!

「それじゃ剣斗。少しO☆HA☆NA☆SHIしようか」

「ち、千冬さん。それはある局の白い悪魔さんのお言葉ですよ」

※悪魔じゃないもん!!

「知らんな。それじゃ逝こうか?」

「千冬さん。行くって漢字が違いますよ」

「気にするな。私は気にしない」

「ちよつ!!待ってせめて弁護士を同伴させてほしい」

「無理だ」

「い・・・いやあああああつ!!」

以後。この事件は『女帝の判決』としてIS学園に長く語られる事になる事は俺も千冬も知るよしもなかった。

第十話

「とりあえず。中国代表候補生おめでどう、鈴」

「ありがとうございます。先生」

俺は千冬のO☆H A☆N A☆S H Iが済みしだい授業に戻った。本当あの時の千冬は怖かったな。まじ俺じゃなかったらトラウマもんだな。うん。

そんなこんなんで昼休みになり俺は鈴と織斑弟達と一緒にいる。嫌だけど。

「まさか本当に候補生になるとはね」

「先生の指導の御蔭です」

「そりやどうも。織斑弟からも何か言ってやれよ。幼馴染なんだろう」

「そうだね……。鈴はいつこっちに戻ってきたんだ??いつ代表候補生になったんだ??」

「そこか!!もつと言う事はあるだろう。『前よりも女らしくなったな』とか『おかえり』とかないのかこいつには。」

「鈴。お前も大変だな」

「はあくく．．．ホントです．．」

「ん??」

「二夏!!／一夏さん!!」

「彼女とはどういった関係なのですか?」

「そうだ!!まさか付き合ってるわけじゃないだろうな!!?」

オルコットと篠ノ乃が織斑弟に迫っている。まあ、好きな男にいきなり別の女が来たらそうなるのもわからなく無いがすごい行き良いだな。ホント。

「べ、別に付き合っているわけじゃ」

「そうだぞ。鈴とは幼馴染だ」

「どうゆうことだ!!幼馴染は私だけだろう!!」

「あくく。箒が引つ越したのは小四の終わり頃だろう。鈴が来たのは翌年の小五の頭の時。だから箒がファースト幼馴染で鈴がセカンド幼馴染ってなわけだ」

幼馴染にファーストとかつけるのはじめて見たぞ。さすが織斑弟。規格外の事をしてくれる。

P i P i P i P i P i P i . . .

突然俺の携帯が鳴った。えくくと相手は．．

「．．．．．悪い。俺はこれで失礼する。鈴、ちゃんと授業受けとけよ」

「はい!! 先生!!」

俺はすぐさま廊下に出て通話する。

「どうした?? マドカ。こんな時間にかけてきて??」

『いや・父さん。今何してるかなって思ってた』

「今は昼休みの時間だ。それで、それだけか??」

『あ、ああ。それだk・ねえさんはどうしてる??』

「千冬か。あいつなら元気一杯に仕事してるよ。夏休み明け位にお前も I S 学園に転入だからそれまで我慢しろよ。暇ならこっちに帰ってきていいから」

『本当か!! なら、いそいでそっちに』

「ただし。ナタルの許可を取ってからだぞ。いいな」

『・・はい』

「そっちは夜中だろう。さっさと寝ろよ」

『・・おやすみ。父さん』

「おやすみ、マドカ。良い夢見ろよ」

『・・・・それは無理かな』

「だろうな。もう少しの我慢だから」

『うん』

「おやすみ」

俺はそういうと電話を切った。

我ながらたいぶ甘やかしすぎたかな。仕方が無いとはいえ俺も甘いな。

うん。甘い。さて、この事をいつ千冬に話そうか。まさか自分のクローンがいて今は俺の子になってるなんて思いもよるんだろう。うん。

「・・・こまったもんだ」

「なにがだ??」

「おわあっ!!ち、千冬いたのか??」

「いたらわるいのか??それで、なにが困ったのだ。もしよければ話くらい聞けど」

「うくくくん。そうだな・・・」

「丁度言いし今話そうか。それとも対抗戦が終わったあたりが言いか。なやむな。」

「いいや。近いうちに話すから」

「なんだ、それだと余計に気なるな」

「そうさ。気になって眠れない千冬を俺は襲うのさ。・・・今夜」

「／／／ば、馬鹿者!!?私達は生徒の見本にならなければならぬのだぞ。そんなこと

ココでできるか!!?／／／」

「ここじゃなければいいんだ。だったらどつかのホテルでもいいぞ」

「／／！！？／／／」

千冬の顔が紅い。こういう顔を見ると胸がドキドキしますね。可愛いですね。このままお持ち帰りしたいですね。

「・・・き・・・」

「なんだって??」

「・・・み・・・き・・・な」

「ごめん。もう一回」

俺が千冬の口に耳を近づける。

「夏休みの時にな」

「な／／／」

まさか。ちょっとした冗談のつもりだったのだが。しかしこれはこれで結果オーライか

「なら、それまでお預けだな」

「・・・うん／／／」

第十一話

「今日の仕事もお疲れ様♪♪」

今日も仕事を終えて後は寮の部屋に戻りビールを飲みながら成績をつけるくらいだ。

「そうだ!!折角キツチンがあるんだし少しつまみを作ろうかな」

たしか冷蔵庫に豚があつたから酢豚でもしようかな。それと千冬も呼んで、その後は久しぶりにそのまま千冬を抱き枕にして寝よう。そうと決まれば急いで部屋に戻ろう。

そして俺は部屋に戻ろうしていると鈴が泣きながら走ってやって来た。

「せんせえ〜」

「おお!!どうした鈴?!!」

「一夏が、一夏が．．うえ〜」

鈴が俺の胸の中で泣き続ける。さすがにこのままだと誤解されそうだったため鈴をお姫様抱っこして俺の部屋に行った。

その時鈴の顔が少し紅かったけど俺は気にしない。

「それで、織斑弟となにがあつたんだ」

「それは．．．．．」

部屋に抱えて連れて来た鈴に俺はオレンジジュースを渡し俺自身はビールの缶を開けて話を聞いてみた。すると鈴もLove'sだった。織斑弟を好きな女達でLove'sだけでもさか鈴までもだったとわ。

そして鈴が中国に帰る時の約束を織斑弟は中途半端に覚えていてそれに怒った鈴が泣きながら走っているのと偶然俺を見かけて俺の胸でないたそうだと。

「まさか……ここまでの男だったとは。鈴、織斑弟の事は諦められないのか?」

「うん。あたしが日本に来たとき一番最初に友達になつてくれたのが一夏で、一夏といると本当に楽しくていつのまにか一夏の事が好きになつてて……」

「なら、今度のクラス対抗戦であいつをボコボコにするか?」

「当たり前!!女の子と約束を覚えてない男なんて風上にも置いて置けない!!」

「なら、俺が稽古してやる。毎日は無理だが、出来る日には俺から声をかけてやるから織斑弟をボコボコにしろ」

「先生は一夏の事嫌いなのか?いつも弟、弟って言っているけど」

「ああ。俺は基本的仲間と思つた奴か興味を持つた奴しか名前を覚えななんだ。教師になつてそれはまずいと思つて性で呼んでいるけど」

「そうなんですか。それで今名前を呼んでいるのは?」

「気になるか」

「い、いえ。それほどでも……」

「最初は千冬。これは高校の時強制的にI S学園に入学されて嫌気を差した時に千冬から声をかけてくれたからだ。その次にナタル。こいつは偶然クラス代表を賭けた試合で戦った時からは仲良くなった。」

「たしか、魔帝と呼ばれていた人ですよ。先生と千冬さんとその人で三帝と呼ばれていた」

「そうだ。それで次が束。あいつは気がついたら俺のそばにいて俺と似たような思考をしていたから仲良くなった。そして俺の不幸が始まった」

「あはは」

ああ、思い出しただけでも腹が立つ。けど、そのおかげでマドカに出会えたのは感謝している。

「そしてお前と桃香（シャンタオ）さんだな。あともう二人いるが、それは近いうちに会えるさ」

「そうですか」

その後は俺の苦労話を鈴に話して言った。さすがに国家機密になりそうな事は言っていないが、それでも鈴は俺の話聞いて驚いていた。

そして気がつけば丁度いい時間になっていた。

「それじゃ、あたしはそろそろ帰ります」

「そうか。明日は放課後あいているからピシバシ鍛えてやるからな」

「よろしくお願いします。おやすみなさい」

「おやすみ」

そして鈴は部屋から出て行った。すると扉が開き千冬が入って来た。

「盗み聞きとは感心しないな、千冬」

「偶然聞いてしまいましたのだ。しかたあるまい」

「それで、話を聞いた千冬は弟の事どう思う」

「呆れてため息しか出ん」

「そうか、弟を鍛えるのはいいが俺も鈴を徹底的に鍛えるぞ」

「なら私もそうしよう」

「弟子の勝負か」

「バカ!!一夏は私の弟だ」

「どうでもいい。そして俺は今日はお前を抱き枕にして寝る」

「ちよっ!!剣斗!!なにをいって」

「聞く耳持ちません」

そして俺は千冬をベットまで運びそのままダイブした。

「おやすみい〜」

「おやすみ、剣斗」

第十二話

「はああつ?!?」

ガチン!!

放課後。俺は昨日の鈴との約束通りアリーナを借りて鈴を鍛えている。そして今俺は鈴にIS用ブレードを喉に向けている。

「ま、まいりました」

「お疲れ。どうだった?? 久しぶりに俺と模擬戦をした感想は??」

「一撃ぐらいいれれると思ったけど・・・まだまだみたいです」

「当然だ。ISを動かしている年期が違う。簡単に負けるわけにはいかないだろう」

「それでも、第二世代の打鉄（うちがね）で第三世代の甲龍（シエンロン）が負けるなんて」

「そうなのだ。今俺が乗っているのは日本が作った打鉄（うちがね）であり、この機体は性能が安定していて使いやすいため訓練機としては最適なものののだ。」

そして鈴が乗っているのは中国の第三世代甲龍（シエンロン）。燃費の良さと安定性

を第一に考えられて作られたISだ。そしてこの甲龍には隠しだまとして両肩にある衝撃砲がある。そして武器に青龍刀がある。

「それがお前の悪いところだ。性能が良くて自分も国家代表候補だから強い。だから俺に一撃を入れることができる」と油断があったからだ。大人だつて子共に喧嘩で負けることだつてある」

「どんな相手でも全力で戦う」

「そうだ。なら、今度やるクラス對抗戦でやることは??」

「一夏を全力で叩きのめす。手を抜くことはしない」

「正解だ。そのために俺から一つ技を教えてあげよう」

「技をですか??」

「そう。俺の十八番であり。接近戦のISなら絶対に覚えておいて損が無いもの。鈴、お前瞬時加速（イグニッション・ブースト）は使えるか??」

「一応使えます」

「いまから教える技はその応用だ。難易度はSSだ」

「SSつて・・・」

鈴が固まるのも無理が無い。瞬時加速（イグニッション・ブースト）でも難易度Sはあるのにさらに高いものを今から教えるのだから。だが、これが使えるようになったら

国家代表の上位に行けるのは間違いない代物だ。

「鈴。今から俺にその双天牙月で斬りに来い」

「え!!でも・・・」

「いいから来い」

「は、はい」

そして鈴は俺に向って双天牙月を振り下ろした。しかしそれは空を斬った。

「う、うそ」

「これが、お前に教える不可視（ステルス）だ。」

第十三話

とうとうこの日が来た。一夏を徹底的に叩きのめす日。

先生に新しいワザを教えてもらい実戦でも三割ほどだけど成功するまでになった。

あとはあたしが一夏相手に手を抜かない事だけ。

「集中しているな」

「先生」

あたしがアリーナの控えて座っていると先生が入ってきた。

「そんな俺の教え子にアドバイスだ。最初の一撃でやれ。おそらくアイツは最初の一撃はなにも考えずに突っ込んでくるはずだ。そこを叩け」

「わかりました。絶対に勝ちます!!」

「なら、勝って来い」

パチン!!

あたしは先生が出した掌を叩き甲龍に乗ってアリーナに出て一夏を待った。

するとすぐに一夏も自分のISに乗ってアリーナに出てきた。自信満々の顔をして。

「一夏!! あんたには絶対に負けないんだから。全力で倒してあげる。そしてあたしと

の約束を覚えてない事を謝らせてあげる」

「その言葉そっくりそのまま鈴に返すぜ」

一夏は雪片式型を展開しあたしも双天牙月を展開する。そしてアリーナに試合開始のブザーが鳴り響いた。

「うおおお!!」

ブザー音が消えた途端一夏は先生の言うとおりに突っ込んで斬りかかってきた。あたしは一夏の動作に集中する。そして雪片式型が振り下ろされた瞬間に姿を消した。

「ど、どこいった?」

ドン!!

「ぐあっ!!」

あたしの龍砲が一夏にあたり。一夏はアリーナ壁に激突した。

S I D E 剣斗

鈴がアリーナに向った後、俺は千冬がいるピットに向った。案の定織斑弟、sも一緒にいた。

「何所に行ってたんだ?」

「弟子に最後のアドバースをな。そっちはどうだ。瞬時加速（イグニッション・ブースト）は出来るようになったか?」

「予想通りってことか」

「当然だ。千冬の考えている事ぐらいわな」

「・・・バカモノ」

千冬の顔が少し紅くなつたが、俺達はモニターを見た。そしてクラス対抗戦が始まつた。

『うおおおっ!!』

予想通り織斑弟は先手必勝のごとく突撃してきた。あとはタイミングと鈴の覚悟しただいだ。

そして織斑弟の斬撃は空をきつた。

「え??どうしてですの。たしかに一夏さんは凰（ファイ）さん斬り掛かつたはずですよね」

「剣斗。とんでもない技術を凰（フェイ）に教えたな」

「さすが千冬。一回見ただけで気づいたか」

「え??どうゆうことですか?」

千冬以外は誰一人として気が付いてないみたいだ。アリーナにいる観客も不思議つ

ていることはモニターごしでもわかる。しかし、ここでネタバレをしてもいいのだろうか??

すると千冬が説明し始めた。

「今のは剣斗が考えもつとも得意とした技術、不可視（ステルス）だ」

それを聞きピットにいた全員が俺を見た。

「不可視（ステルス）は相手の僅かな隙に瞬時加速（イグニッション・ブースト）で手の後ろに回り込む技術で取得難易度SSになっている」

「SSS!!」

千冬の説明で篠ノ乃とオルコットはさらに俺を見てくる。

「た、確か不可視（ステルス）は織斑先生の技術でしたよね??」

山田先生が千冬んに疑問をぶつける。確かに千冬はモンド・グロツソの時に連続瞬時加速（ダブルイグニッション・ブースト）と不可視（ステルス）を使っていたが、それを自分が考えたなど一度も言っていない。

だから、俺と千冬の同期の奴等はそのことを知っている。

「違うな。確かにモンド・グロツソで私は不可視（ステルス）を使ったが私が考えたとは一言も言っていない。世間が勝手に私が考えたと勘違いしただけだ。現に私と剣斗の同期の者は不可視（ステルス）が剣斗が考えた技術だと知っている」

「それで、どんな原理なのですか?」
オルコツトが興味津々に聞いてくる。

「どうした?? そんなに突っかかってくる」

「当然ですわ。取得難易度SSの技を取得するしないでは国家代表の上位に食い込むかの違いですもの」

「そうか。なら、簡単に説明してやる。不可視(ステルス)に必要なのはタイミングと覚悟だ」

「タイミングと覚悟ですか?」

俺の言葉に篠ノ乃が聞き返してきた。

「そうだ。さつき千冬も言っていたが不可視(ステルス)は相手の隙を見て瞬時加速(イグニッション・ブースト)を使って後ろの回り込む技だ。だが、それは相手の隙を見て一瞬で出来るタイミングと失敗したら大ダメージ受けてしまう失敗の許されない覚悟が必要だ。まさに大博打だな。成功すれば相手に大ダメージ。失敗したら自分が大ダメージをくらう」

「それでしたら。なぜ鳳(フェイ)さんは出来たのですか?」

「それは、俺が対織斑弟として鈴と模擬戦したからだ」

「それは鼻屑じゃないですか?! ひとりの生徒に技術を教えるのは」

「そうか?? 鈴は織斑弟に負けないよう鍛えてくださいと言ったんだ。それに答えてやるのが先生つてもんだろう」

「そ、それもそうですが・・・」

「それに、女の約束をも覚えてない男は一度ボロボロにされたほうがいいぞ。今後のためにな」

それを聞き篠ノ乃は黙ってしまいオルコットも何も反論しなくなつた。

そして、勝負は鈴が優勢に進んで行つた。

第十四話

「はあああつ!？」

「甘い!!」

さつきからあたしと一夏の攻防が続いている。

「やるじゃない一夏」

「毎日箒とセシリアに鍛えてもらっていたからなっ!!」

一夏が振りかぶりながらやって来る。これならもう一度不可視（ステルス）で

ズカアツ!!

「!？」

突然真上から衝撃がきた。あたしの龍砲も威力が大きい。

そして煙の中から見しらぬISが出てきたけど。

「一夏!! 試合は中止よ。ピッドに戻って」

「鈴はどうするんだよ!!？」

「あたしは一夏がピッドに戻るまで時間を稼ぐわ」

「なっ!!何考えているんだ!!」

「大丈夫。きつと先生達も急いで来てくれるはずだから」

その時先生からあたしと一夏に通信がきた。

『鈴。無事か??』

「俺は!!?」

さすが先生。こんな非常時でも一夏嫌いは健全なのね。

「あたしと一夏は無事です」

『そうか。まず、悪い知らせだ。そのISのせいで鈴の救出には時間がかかる』

「だから俺は!!?」

『だが心配するな。5〜6分耐えてくれたら俺が助けてやる』

「先生。ひとつ質問なんですが」

『なんだ??デート誘いならあとにしろ』

「違います!?!ー別にアイツを倒しても良いですよね」

『出来たら実技点プラス俺の個人鍛練をプレゼントしよう』

「約束ですよ」

『ああ、約束だ』

そして先生との通信が切れた。切れる寸前に山田先生が何か言おうとしていたけど

別に気にしない。今からはアイツをどう倒すか考えるだけ。

「変わったな」

「なにが??」

「以前の鈴なら『絶対に倒してやる』て言ったのにな」

「かもね。けど、あたしは剣帝黒羽剣斗の弟子よ。先生の教えは守るは」

「どんな教えだ??」

「最初から全力で自分の今できることをやる。そしたらいつか勝利への道ができる」

「なら、行くか。向こうも待っていてくれたみたいだし」

「あたしの足を引っ張らないでね。一夏」

「その言葉そのまま返してやるぜ」

第十五話

「もしもし。織斑君聞こえてますか?! 鳳さん!?! ーダメです。二人とも応答ありません」

「剣斗の言葉で風の気持ちに闘志がついたか」

「いやー。まさか鈴があんな事を言うとは」

「嘘つけ。風が言ったとたん顔が笑ってたぞ」

正直言つて今も笑っているはず。いや、確実に笑っているだろう。なんせ弟子がここまで自信を持ってくれたのだから師匠としては嬉しいもんだ。

「御二人はどうしてそんなに冷静なのですか?!」

どうしてつて、それは俺が行くと言ったからに決まっているだろう。——千冬さん。それは砂糖ではなくて塩ですよ。なんでここに塩がある??

「コーヒーでも飲んで落ち着いたらどうだ、山田先生」

「織斑先生それは『砂糖』ではなくて『塩』ですよ」

山田先生の指摘を聞いて千冬は今さつき入れた粉末の器を手を取った。それには大

きく『塩』と書かれている。

「剣斗。お前気づいていただろう」

「なぜ犯人は俺みたいに聞く。確かに気づいていたがどうして塩がここに必要か考えていて言うのを忘れていた」

「キサマアー!!」

千冬がどこから出したかわからないけど出席簿を俺に当てようと降り下ろしてくる。それを俺が避けると千冬はさらにスピードを上げて襲ってくる。

「自分の失敗を人に押し付けるのはよくないぞ」

俺の忠告に千冬もようやく冷えてきたのか攻撃を止め大きく深呼吸した。

「やつぱり。織斑先生も織斑君の事が心配だったのですね。だかたそんなミスを・・・」
山田先生。いま言っただけいけない事を言ったな。お悔やみを申し上げます。俺は山田先生に向かって手を合わせた。

「な、なんなんですか!!黒羽先生はなんで手を合せているのですか!!?」

俺の行動に理解できず焦りだす山田先生。そんな山田先生を黒い笑みを浮かべた千冬が捕まえようとしていた。

「山田先生」

「(ビクッ!?)」

千冬に呼ばれて山田先生は恐る恐る振り向いた。そして千冬の顔を見るなり顔が青くなつて行くのがわかった。

「山田先生。コーヒーをどうぞ」

「……織斑先生。それは塩が入った……」

「どうぞ」

「……はい」

千冬の気迫に負けた山田先生はそのまま塩入コーヒーを受け取った。

「熱いので一気に飲むといい」

「鬼だ!!いや、ここはI S学園だ。あの白い悪魔の再来だ!!」

※悪魔じゃないもん!!次言ったらO☆H A☆N A☆S H Iしよつか。

「先生!!」

突然オルコットが叫びだした。

「どうした??オルコット??」

「わたくしにI Sの使用許可を!!すぐに出撃できますは!!」

「却下だ。いまさつき言っただろう。俺が出る」

「しかし!!」

「お前が喰つてかかっている間に鈴達の救出がどんどん遅れるぞ。これを見てみる」

俺の返答に不満があるオルコットにある情報を見せた。

「第二アリーナの遮断シールドレベル4に設定。——しかも、全ての扉がロックされて・・・あのISの仕様ですよ!?!」

「おそろくな。生徒の避難の避難も鈴達救出もこのロックを解除しないといけないだろう」

「いけるか?」

「当然!!」

不安な顔をして聞いてくる千冬に俺が笑顔で答えてやった。もちろん解除の作業をしながら。

「いまは待つしかないのですね」

「神にでも祈つとけ」

俺は光速の速さで端末を叩いていった。そういえば篠ノ之の姿が見えないがどこにいった?!

S I D E 篠ノ乃箒

「はあ、はあ、はあ・・・」

私はただ只管に走っていた。

一夏と凰が試合をしている最中に出てきた謎のISを見て私はいても立つてもいら

れずある場所へ向って行った。

「ちよつと!!何所に行くつもり??」

「危ない!!」

客席から逃げてくる生徒にぶつかりそうになるが私はなんとか目的地の中継室につく。ドアの前に立つトアが勝手に開き中に入った。中には審判の先生とナレーターが生徒がいた。

「なっ!!あなたどうやって中に!!」

「ここは危ないから。早く逃げましょう!!」

「うるさい!!」

「バシ!!バシ!!」

二人を一撃で伸して私はマイクを掴んで叫んだ。

「一夏!!」

S I D E : 織斑一夏

「.....くっ」

一撃必殺の間合い。けれど、俺の斬撃はするりとかわされる。これで四度目だ。

「なにやってんのよ一夏!! 一体何回同じことをしてるのよ!! ちゃんと狙っているの?!!」

「狙ってるつーの!!」

普通ならかわせられない角度から攻撃しているはずなのに、相手はそれを意図も簡単にかわしていく。

「一夏!! 離脱!!」

「お、おう」

敵の攻撃を回避する。相手のISは長い腕をコマの様には回転しながら攻撃してくるし、レーザー砲撃もしてくる。

しかも四度の攻撃の失敗でシールドエネルギーの残量が60を切っている。バリア無力化攻撃を出せるのも後一回が限度か。

「鈴。あとエネルギーどれくらい残っている?」

「180つてところね。そろそろ先生も来ていい時間のはずよ。それまでなんとか持ちこたえるわよ」

「さつき『倒してもいいですか?』って言ったのは何所の誰だよ」

「あれは倒すことが出来たらって話しよ。それに、まさかあんたがあんなに攻撃をはずすなんて思ってもいなかったわ」

「うっ・・・」

それを言われると何も言い返せない俺である。そういえば、さつきからあのＩＳは攻撃をしてこないな。

「なあ、鈴」

「なに??」

「あのＩＳつてもしかして無人機じゃないのか」

「はあ?! あんた何言ってるのよ。ＩＳは人が乗って動くものよ。もし無人機を作れたのなら各国が知らないはずが無いでしょう」

「それもそうだが。さつきから俺等が話している時は全く攻撃して来ないじゃないか。俺等がしている時だって反撃だけでしかも攻撃の仕方は同じ」

「仮に、仮にあのＩＳが無人機なら勝てるって言うの??」

「ああ。人が乗っていないのであれば容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

零落白夜の能力があればＩＳの絶対防衛も断ち切れる。訓練や学内対戦で全力を使うわけにはいかないが、無人機なら最悪な事態になっても大丈夫だ。

「次の攻撃絶対に当てる自身はあるよね??」

「ああ。次は絶対に当てる」

「一つ策もあるしな。」

『一夏!!』

突然アリーナのスピーカーから聞き覚えのある声が鳴り響く。俺はすぐさま中継室の方に顔を向けた。するとそこには箒の姿があった。

「なにやってるんだ!!箒!!」

『男なら・・・男ならそれくらい敵に勝てなくてなんとする』

館内放送で箒の音が響き渡る。その声に敵のISも反応して箒のいる中継室の方を向いている。

「まずい!!逃げろ箒!!」

俺の声と共にISは箒の方へ向って行った。

「逃げろおっ!!」

第十六話

「逃げろおっ!!」

俺の声と共に謎の I S は箒に向けてレーザーを放った。俺はただ目を瞑る事しかできなかった。

「全く。いないと思ったたらこんな所で何してるんだ、篠ノ乃」

その声が聞こえたので俺は恐る恐る目を開けてみるとそこには I S に乗った黒羽先生がいた。

「先生!!」

S I D E : 黒羽剣斗

俺は全てのロックを解除しピットからラファールに乗りアリーナへ出た。すると管制室から篠ノ乃がマイクを持って叫びだした。

『一夏!!男なら・・・男ならそんな敵に勝てなくてなんとする』

篠ノ乃の叫び声に謎の I S が篠ノ乃の方を向き向って行った。

「まずい!!逃げろ箒!!逃げろおっ!!」

織斑弟の声が叫びその声と同時にISの手からレーザーが放たれた。

「……黒火……」

俺は黒の刀〈黒火〉を展開し瞬間加速（イグニッション・ブースト）を使い篠ノ乃とISの間に入りレーザーを斬った。

「全く。いないと思つたらこんな所で何してるんだ、篠ノ乃」

「先生!!」

鈴と織斑弟が俺に気づき叫びだす。しかし、俺は正面にいるこのISだけに意識を集中させた。なぜなら敵は正体不明のIS。他にどんな武器を持っているか不明だったからだ。

だが、一つだけわかっている。こいつには人は乗っていない。人が出す殺気を感じないからだ。

「コアごと斬つても怒るなよ。千冬」

ISは手からレーザーを打ち出す。それを見計らつて俺は不可視（ステルス）で相手の横に回り込み黒火を振り下ろし腕を切落す。鈴達は顔が青く染まっていたが、今説明する暇は無い。

ISは反対の手で俺を掴もう腕をが来る。

「おそい!!」

その手も黒火を振り上げ切落す。

そして何も出来なくなったISSの首と両足を切断し。そしてISSは、そのまま地面へと落ちて行き機能を停止する。

「お、俺達があんなに苦勞してたISSを一瞬で……」

「やっぱり先生には敵わないは……」

織斑弟は在り得ない様な顔し、鈴は自分はまだまだだと思っっているようだ。師としてはうれしい事かな。

「お疲れ様、鈴。ついでに織斑弟」

「俺はついでなのか!!」

「ああ、それと篠ノ乃はすぐにピットに来るように。俺と千冬で説教だ」

俺は管制室にいる篠ノ乃にそう言い放つ。彼女はマイクつかって「はい」と答えた。

正直言つてムカつく。自分の行動がどれだけ迷惑を掛けたかわかってないようだ。

「二人もピットに戻れ。俺はこのISSを運ばないといけない」

「わかりました」

「それじゃ、先生。またあとで」

そして二人はピットに向つた。

「ふうふう。やってくれたな束」

俺はおそらく確実にこのISの製作者に向けて愚痴をこぼしながら空を見上げた。

「どうしてあんなことをしたんだ?？」

「・・・」

今現在俺と千冬は篠ノ乃の説教中だ。篠ノ乃の近くには織斑弟と鈴とオルコットがいる。

「なぜ黙り込むんだ、篠ノ乃。俺は理由を聞いてるだけだぞ」

「・・・」

しかし、篠ノ乃もさつきから黙り込んだままだ。いい加減しないと俺もキレるぞ。

「あの・・・皆無事だったし・・・もういいじゃないのか?？」

無言の空気の中織斑弟が言いだした。しかも、今俺が一番聞きたくない事を言いやがった。

「つまりあれか。お前は今回は誰一人もけが人が出なかった。だから篠ノ乃を許せと言っているのか?？」

「そこまでは、けど、筈も反省しているしもういいじゃないか」

「・・・千冬」

「そ、その……すまん」

俺が千冬の顔を見ると千冬は謝ってきた。オルコットと鈴はただ見ているだけ。

「織斑。それはただの結果にしかすぎない。もしあの時黒羽先生が間に合っていないかったら篠ノ乃含め三人が怪我をした。最悪死人が出てたんだぞ」

「けど千冬姉、今回は「くどいぞ!!」……」

「篠ノ乃。お前は一週間の停学だ。部屋で大人しくしてろ」

「そんな!!」

「退学じゃないだけありがたく思え。以上だ。早く部屋に戻れ」

そして鈴達は部屋へと戻っていった。

SIDE：織斑千冬

一夏達を部屋に返して私は安堵のため息が出た。あのまま行っていれば確実に剣斗がキレていたはず。いや、もうすでにキレてるな。

「礼は言わんぞ」

「わかっている」

よく見ると剣斗の右手から血が垂れていた。余程強く握っていたのだな。

私は剣斗の手を取ると持っていたハンカチで血を拭き取った。

「最強の剣帝に歯向かうとわ。怒るべきか誉めるべきか・・・」

「どっちでもいいだろう」

剣斗が呆れ顔をしている。

「黒火を使ったな」

話をかえる為に、私はさっきの戦いで使った刀について聞いた。

「ああ。そろそろ使わないとアイツが愚痴る」

「親である束に唯一反抗できるＩＳか」

すると剣斗の腕にある十字架が光だし光が一人の女性が出てきた。

「お久しぶりだな。剣斗、千冬」

「久しぶりだな、式」

「約一ヶ月ぶりか」

「この姿出会うのわな」

彼女が世界で唯一四次移行（フォースシフト）し擬人化できるＩＳ。世界最強のＩＳ
と言って間違いない。

「何しに出てきた？」

「ダメだったか？」

「いや。今から呼ぶつもりだったし別にいい。それであのＩＳの事だが」

「ああ。今もコアネットワークで検索中だ。なにかわかったら報告するよ」

「頼む。まあ、だいたい想像はついているがな」

「あいつにも困ったもんだ。それじゃ、わたしは戻る。千冬。剣斗の事頼んだぞ」

「そういう残し式は元の待機状態に戻った。」

「さて、行くか」

「お、おい!!」

いきなり剣斗が私の手を握ってきた。けど、私はそれがとてもうれしい。それは剣斗の温もりを感じられるからだ。

「そ、それで。何所に連れて行くきだ」

「もちろん俺の部屋だ。今日は千冬のダメ弟のせいで俺の精神は不安定となった。これを癒すには千冬を抱き枕にして練るのが一番だ!!」

言い切ると同時に剣斗は私の返事を聞かず寮へと歩みだした。本当は本番でもいいんだぞ。

「それは夏休みでな」

「なぜわかった」

「さあ。どうしてでしょう」

「.....バカモノ」

おまけ

ある研究施設

ISの創作者篠ノ乃東はモニターと睨めっこしていた。

「うゝゝん。やつぱけんくんは式を使わなかったかゝ。黒火だけを見てみるとあの時から変わってないようだけど。けんくんの事だからいろんな剣が増えている気がするなゝ。けど、けんくんの子のコア入れないし。どうしよつかない?」

「そうだ!!紅椿には新たな刀をつけてあげよう。私って頭良い!!さすが天才科学者。これで箒ちゃんも喜んでくれるよ。きつと!!」

PIPIPIPI

「おやおや。この東さんに電話してくるのは誰かな??もすもす♪」

『東??わたしよ』

「ナタルちゃん!!どうした?」

『マドカのISの方は完成してる??』

「もちろんだよ!!蒼桜（あおさくら）はもう完成してるよ♪♪」

『それはよかった。それじゃ、夏辺りに取りに行かせるわね』

「了解だよゝゝ」

『じゃ、また今度』

「バイバ〜イ♪」

「いやいや。東さんも働きの者だね。これは後でけんくん一杯褒めてもらわないと。待っててねけんくん♪」

第十七話

謎のISの強襲から一週間が経ち、篠ノ乃の停学が取れやつとクラス全員が揃った所でまた新たな転校生が一組に来るそうだ。山田先生また残業だな。

ちなみに転校生の一人はラウラ・ボーヴィツヒで、千冬が一年俺が半年教官していたドイツIS部隊の教え子だ。会った瞬間『お久しぶりです。織斑教官、ち・黒羽教官』と呼ばれたときは、千冬の目が怖かったな。『どうゆうことだ』って感じで睨みつけてくるもんな。普通の人ならあの目で死んでたな。それに、ラウラ。お前絶対に『父』と呼ぼうとしたな。

ブン!!

ヒヨイ

「・・・ちっ!!」

「千冬。今の当たったら死んでたぞ」

「殺すつもりでやったからな」

おお怖。出席簿で殺人とか前代未聞だよな。これ、新聞の一面取れるんじゃないか。

『劍帝、出席簿で死す』って題名で。

「ラウラになぜ教官と呼ばれている??」

「俺も一時期ドイツの教官をしていたんだよ。ラウラとはその時に出会った」

「お前が人に教えるとはな」

「その時々あったんだよ。天災、ウサミミ、ニンジンのせいで」

あの時は本当にしんどかった。軽く二回は死んでたね。核誘導ミサイルとか人に向けて討つ代物じゃないし。

「そうか」

俺の説明で一応納得はした千冬。どうみても俺の顔で悟ったな。

俺達は教室へ向った。

SIDE：織斑一夏

箒の停学が終わり俺たちはトーナメントに乱入してきたISについて話していた。

「しかし、あの無人機はなんだったんだらうな」

「わかりませんわ。詳しい事に関しましても極秘扱いにされてますし」

「あたしと一夏も口外禁止って千冬さんに言われた」

鈴の言うとおり、俺と鈴は事件の次の日の朝に千冬姉からきつく言われた。それも未

確認 I S だけでなく黒羽先生が戦闘をした事もだ。

だから、あの I S を倒したのは俺と鈴と事になっている。それによって、クラスの皆から期待の目がより一層強くなつたのはマジで勘弁して欲しい。

「けど、黒羽先生の早業にはマジビックリしたな」

「一夏は、先生の事どれ位知ってるの？」

「ええ〜と、世界で初男で I S を動かした事ぐらいかな」

「「はああああつ!!」」

箒、鈴、セシリアの三人が同時に信じられないって反応してきた。

「し、信じられませんわ。黒羽剣斗と言えば I S 界での三帝と呼ばれている御方ですのに」

「一夏。あなた本当に知らないの？三帝とかも？」

「なんだ、その三帝って？」

その質問に箒が答えてくれた。

「一夏。千冬さんが女帝。つまり、ブリュンヒルデって呼ばれているのは知っているな」

「それくらい知ってるぞ」

「それに黒羽先生は剣帝とアメリカ人のナターシャ・ファイリスの魔帝。三人合わせ

て三帝と呼ばれていたんだ」

「へへへへ。黒羽先生ってそんなにすごかったんだ」

「そして、黒羽先生はIS学園初代生徒会会長をされていましたのよ。織斑先生とナターシャさんが副会長でしたわ」

「ま、まじか」

セシリアの追加の言葉に俺はさらに驚く。

「当然よ。あたしの先生なんだから」

「そういえば、鳳さんはどちらで黒羽先生と御知り合いになったのですか？」

セシリアが鈴に聞いている。おそらく中国にいる時だろうな。

「あたしが中国に帰って一週間が過ぎたぐらいに、お母さんが先生を連れてきたの。なんでもサイフを落としてそれを拾ってくれたみたい。それで、お礼に夕飯をご馳走したら先生とお母さんが意気投合して、あたしにISの乗り方を教えてくれたってわけ」

「そんなことがあたんだな」

「その御蔭で国家代表候補まで行けたんだけど」

鈴の話を聞いてセシリアと箒は鈴の強さに納得がいったみたいだ。確かにあの強さ見せられてその人に教えてもらったたら強くなるわな。

そしてチャイムが鳴って、ドアから山田先生が入って来た。それに続いて初めて見る

生徒も入って来た。

「皆さんおはようございます」

「「おはようございます」」

「まずは、皆さんにお知らせがあります。今日からこのクラスで、皆さんと一緒に勉強するシャルル・デュノア君とラウラ・ボーデヴィツヒさんです」

まさかの男の転入生が来た。

第十八話

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。よろしくお願いします」
デュノアが挨拶をする。

一瞬だけクラスが静かになった。その間に俺と千冬は耳を塞ぐ。
すると

『きゃああああああつ！』
クラスの女子が叫びだした。

耳を塞いでもこの音量だ?!このクラスの女子はバケモノか!?

「男の子。織斑君と黒羽先生と合わせて三人目!」

「しかも、守つてあげたい系!かわいい!」

「地球に生まれてよかった!」

各自おもむろに叫びだす。

そして最後の奴。それはないだろう。

「あくもう騒ぐな!静かにしろ!」

千冬の一喝で生徒は一瞬で静かになった。

さすば最強の女帝。一喝で黙らすとわ。

ビュン！

ヒョイ

「殺すきか？」

「いらぬ事を考えているからだろう」

毎回思うが、なぜ俺の心がわかるのだろう。読唇術を会得していているとしてもバレ過ぎないか。

「み、皆さん。まだ、自己紹介は終わっていませんよ」

山田先生の言葉を聞いて、全生徒がラウラに視線を向ける。

しかし、ラウラは挨拶しようとしなない。

それにかかれた千冬がウラウラを注意する。

「ラウラ、挨拶しろ」

「はい、教官」

敬礼するラウラ。

それを見て生徒が少し騒ぎ出すが別に注意するほど大きくないからそのままにしておく。

「もう私は教官ではない。ここでは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そして、ラウラは一步前に出た。

「ラウラ・ボ……」

自己紹介の途中でやめたラウラは俺に目をむけ何かを言いたいかのごとく訴えかけてくる。

そんな目で俺を見るのはやめてくれ。千冬の後ろに般若がいるじゃないか。しかし、俺は頸を縦に振ってしまった。

「コホン。ラウラ・B・黒羽」

ラウラがそう名乗った。

するとクラス全員と千冬、山田先生までもが理解できずに静かになった。そして数秒後。

『えええええええつ！』

全員の叫び声が教室を響かせた。

そして真つ先に動いたのは千冬だった。

千冬は俺の胸倉を掴むと壁際まで押し込んで行った。

「どうゆうことだ。説明しろ！」

「さつきドイツで教官していた事を話しただろう。その時にちよつとあつてな。ラウ

ラを養子にした」

俺が話すと千冬は下を向いて震えだした。

「千冬。黙っていたことは悪かった。いつかは話そうとしていたんだが」

「だったら。会った日に話せ！」

千冬の強烈なパンチが俺の顎に直撃した。

「ち、父上!？」

意識が朦朧としている中、ラウラが俺のところに近づいて来ている事だけがはっきりとわかったが、俺はそのまま意識を失った。